

佐 啓

社会福祉法人 佐 啓 会 ふる里学舎

〒290-0265 市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

発行者 里 見 吉 英

編集者 三 股 金 利

鬼はそと、福はうち

里見 吉英

「福はうち、福はうち、鬼はそと」

久しぶりに夕食前に帰宅し、玄関のドアを開けると、中からマメのあられを浴びた。小学生になる息子と娘の仕業である。

普段は朝食に顔を合わせるくらいで、土日はほとんど仕事にとらわれているため、子供達にとっては本当に鬼だと思っているのか、そのマメには力がこもっていた。レジャー

の約束をしても、最近では「また仕事でダメだよな」などと二十四時間、一年三百六十五日動いていることを考えれば、当然のことかもしれないが、いつの間にか学舎にいる方が私自身安定してしまうのかもしれない。

昨年念願の女性棟をオープンし、何とか落ち着いて八年目を迎えるようになっている。

ところで、時代はまさに施設福祉から地域福祉へという流れの中で、地域療育等支援施設事業(以前のコーディネーター事業)の認可を県下で最も早く受け、現在専任コーディネーター一名と六名のサ

ブコーディネーターで「地域サービス係」を組織し、県下で約三百家族の登録者に対して、そのケアにあたっています。この事業は、学舎の中でも大きなウエイトを占めるようになってきており、「施設が核となって普通の暮らしを支える」という視点に立ち、寮生は安心・安全・快適な暮らしを、在宅者においては、家族を含めてのサポートを目指しております。

収容の時代から利用の時代となり、種々な機能を持ちつつでも簡単に、快適に利用できるように日々努力していますが、なかなか発想の転換がスムーズにいかないのも現状です。その理由のひとつに施設側の姿勢の問題が挙げられますが、利用する側、特に家族の皆さんの施設に対する偏見や不信感というところも、その垣根を越えられない原因の一つであることを、この事業を通じて感じているところです。

高齢者福祉では介護保険導入に伴い、本年四月一日より待ったなしで措置制度から利用契約制度へ移行されます。

障害者福祉も二〇〇三年から契約制度が導入されることになっていきますが、まだまだ不透明なところが多く残り、解決されなければならないことが山積しております。例えば、選考といってもそれほど施設の数に満たされているのか。

本人が選ぶといっても実際は保護者が選ぶことになる知的障害者の場合、果たしてそれで本人の権利は守られるのか。費用面の負担はどうするのか。等々、少しでも本人の立場が不利にならないように考えていかなければならないのは言うまでもありません。

長い目で見ると、障害者施設はリゾートホテル型と有料老人ホーム型になっていくのではないかと思います。前者は本人や家族の状況に応じて長期利用する人や短期利用する人等それぞれの目的に添って利用するところ、後者は高齢者のためのターミナルケア的な役割をする施設。二十一世紀のいつの頃かこのような役割分担がなされていくだろうと勝手に考えています。

何はともあれどんな生活形態を選択しても、それを支援するわれわれ職員もそこそこ楽しく、そして何よりも本人と家族が楽しく過ごすことが一番大切だと考えます。この十年間は、福祉の形も大き

く変わるだろうと予想されますが悲観的でなく前向きに、ある意味では楽観的にひとつひとつ検証しながら積み重ねていきたいと思います。

(施設長)



坂田 大士

姉

姉と僕の付き合いも今年で二十年になる。姉が障害者を持っている事に気付いたのはいつ頃なのかはつきり覚えていない。小学校の頃までは、いつも母と姉と一緒にバスや電車に乗って出かけていたのを覚えている。姉とは同じ保育園で一年間だけ一緒に通っただけで、小学校、中学校とまったく別の学校で一緒だったことはない。僕はいつも歩いて数分の近くの学校へ通い、姉はいつも遠くの学校へ通い、一緒に通っていた。

姉は陽気だが、騒ぎたい時に騒ぎ、食べたい時に食べ、寝たい時に寝る。常にマイペースだ。わがままばかり言っていて親を困らせている姉を見て、

「なんでこれが姉なんだ。いっそのこと居なければいいのに。」と思っていた時期もあった。それでも、しかられている自分を見ると、いつも横にいて心配そうな顔で味方をしてくれているやさしい所もある姉である。

何年生くらいだろうか。友達の間で気になり始めた頃から、外では自然と姉と距離を置いて接してきた。友達から姉の事をどう思われるか、見られるのかばかりが気になっていたのだと思う。

姉は今、ふる里学舎の仲間と楽しく生活しているようだ。これから両親とより姉との付き合いが長くなると思う。姉が落ち着いた生活ができるように、姉と両親のサポートをしていきたいと思っている。

今回、母からお姉ちゃんの事について何か書くようにいわれ、正直困ったと思って、一ヶ月が過ぎ、期限が過ぎてせばつまり、とうとう一番苦手な文章を書くことになってしまったが、姉の事を考えるいいきっかけになったと思っている。

今まで、自分本位な考えで姉に接してきたが、これから、友人にも自然体で普通に姉を紹介できる自分になりたいと思っている。

(坂田 翠・弟)

「お前、ドイツに行つて来い」。施設長から言われたこの言葉に驚きと同時に、自分などが行つても良いのだろうかという不安がじわじわ沸いてきたのを、今でも鮮明に思い出す。

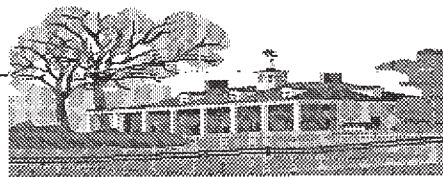
「施設はなんにも心配いらないから」という主任の温かい言葉に送られ、私は十一月四日から十二日迄、ドイツ社会福祉経営セミナーへ参加した。今回の研修のテーマは、「ドイツ介護保険の現状と課題について」。ドイツでは、今年四月から日本でも施行される介護保険を一九九五年から実施しており、いろいろな問題点や課題を勉強してくるというのが目的であった。参加者の殆どは、老人関係の施設経営者であったため、私のような指導員が参加して大丈夫なのかという不安がかなりあった。そして出発。飛行機には何度か乗った事はあったが十二時間というフライトはさすがに長かった。最初の訪問地はフランクフルト。町には超高層ビルが立ち並びちょうど東京の高層ビル群に似ていたため、本当にドイツにきたのかなというのが最初の印象だった。ドイツでは東西統合後、平和になったという印象が強いが、実際は旧東ドイツの間が入ったことで、以前に比べるとかなり治安が悪くなり、特にスリやひったくりは、頻りに発生している。やはり日本は一番平和だと改めて感じた。

フランクフルトでは、行政と私営の老人ホームの二ヶ所訪問し、介護保険導入後の問題点などを伺った。ドイツの介護保険は、日本と異なり介護度の基準が最重度の要介護を含めると四段階に分かれているが、一番の問題点はやはり介護認定に対する苦情が絶えないという事であった。認定を巡って最高裁まで争っているというケースも少なくないようで、日本でも現在試行的に行っている介護認定でさえ苦情が絶えないという状況を考えると、

苦情処理についてもいろいろなケースに悩んだ解決策が必要なのではないかと思った。またドイツの保険給付は、家族介護が前提となっているため、在宅者については、介護サービス(現物給付)、介護手当(現金給付)両方を組み合わせるコンビネーション給付の中から要介護者自身が選べるのに対し、施設利用者については、介護にかかる費用については、施設へ給付され、宿泊費や食費は自己負担となっており、給付限度も介護費用の七十五%となっている。施設を利用するよりも在宅の方が同判定でも支給されるお金が多い分、優遇されているのなという印象を受けたが、介護度が上がる分、その家族にかかる負担は大きくなるため施設への入所希望者は多く、施設は超高齢で重度の方が殆どといった状況であった。

次の訪問先の首都ベルリンでは、十一月七日から十一日まで滞在。十一月九日はちょうど十年前ベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツが一つの国になった記念日だったため式典が開催されるという事で、町には厳戒体制が敷かれ、異様なムードが漂っていた。訪問先に向かう途中、まだ少しだけ残っているベルリンの壁を十分程見学した。壁は思ったよりも薄く、ハンマーなどで叩けば簡単に割れてしまふのではないだろうか。しかしこの壁によって東と西、全く違った世界があったのかと思うと、壁がなくなった事がドイツ国民に与えた影響は計り知れないものであるという事を痛感した。

ドイツとお酒と福祉の旅



ベルリンでは、介護保険の保険者、国の行政機関、民間の老人ホームの訪問が主であった。ドイツでは、MDKと呼ばれる日本で言うケアマネジャーに類似したスタッフが、要介護認定の審査を行い、保険者である介護金庫という独立した組織がMDKの審査結果を基に介護度を認定するという仕組みになっている。MDKが審査を行う際一番難しいのは、やはり障害者の審査である。今までここに記していなかったが、ドイツの介護保険は、全国民を対象にしているため、老人だけに限らず障害者にも、介護保険の給付が行われている。その障害者の審査が一番難しいというのは、やはり障害者施設に勤める私にとっては興味のある部分であった。難しいというのを一言で言うところ、検査結果が軽い認定になつてしまふというところである。重度・最重度と言われる方達も、幼少の頃から訓練で、障害となつていく部分を何らかの形でカバーしている。例えば、

指導員 平井 晋也

視覚障害の方の点字や、聴覚障害の方の補聴器など、介護を必要とする部分が軽減されることで認定は低く出てしまふ。実際に障害を持った本人やその家族にしか、訓練の成果が出るまでの大変さは分からず、その大変だった部分に対しての形は介護認定では表れない。これだとやはり、本人や家族には、何とも言えないものか少しさみしいものがあるのではないだろうか。知的障害者において同じような状況であり、判定基準を介護度だけにしてしまうのは、おかしいのではないかと。日本でも現在、障害者に対して介護保険

を導入するか検討されているが、介護度だけに限らずその他の判定基準を設けていなければ、ドイツと同じような事態になるのではないかと考えた。

恥ずかしい話であるが、老人ホームというのはドイツに行く一度も見学した事がなかった。実際に何ヶ所か見学して、その設備の豪華さに正直驚いた。参加した方に日本の老人ホームはどうか尋ねると、設備面は日本も負けていないそうである。これは介護保険がもたらした施設間のサービス競争の結果のようだった。実際、ドイツ赤十字が経営する老人ホームは、このままでは他施設との競争に負けてしまふ為、ハード面で大がかりな工事を行うという説明があった。介護保険によつて様々な影響が出てくるという事を感じた。ドイツの観光では、ライン川下りに参加した。ちょうどその日は、私の記念すべき三十才の誕生日。川沿いに並び古城や山一面に広がる葡萄畑を見ながら、白ワインを飲んでいる自分に、こんな贅沢な誕生日を迎えられるのは絶対自分だけだろうなと、今までの三十年を振り返りながら一人酔いしていた。

編集後記

駅伝の選手であるUさんは、マラソンの事を「ファイト」と表現する。大会当日に彼と一緒に走る私に、「ファイト一緒!」と声を掛けてくる。「一緒に頑張ろう」と励まされている語感が嬉しくもあるが、お互い朝が苦手な練習不足。「佐啓」も完成したことだし、そろそろ彼と「ファイト」してみよう。